

## 『カクキューの八丁味噌を愛した著名人』

～ 松井 弘 ～

1890年(明治23年)～1968年(昭和43年)。

愛知県岡崎市出身。大正から昭和期の文化人。号は菅甲。「みどりや」主人。  
「岡崎朝報」記者。「新愛知」新聞初代岡崎支局長。岡崎市会議員。

1921年(大正10年)岡崎市康生町に玩具店「みどりや」開業。岡崎市の教育・文化・観光の向上開発に尽力され、特に1959年(昭和34年)の岡崎城復元に努力されました。

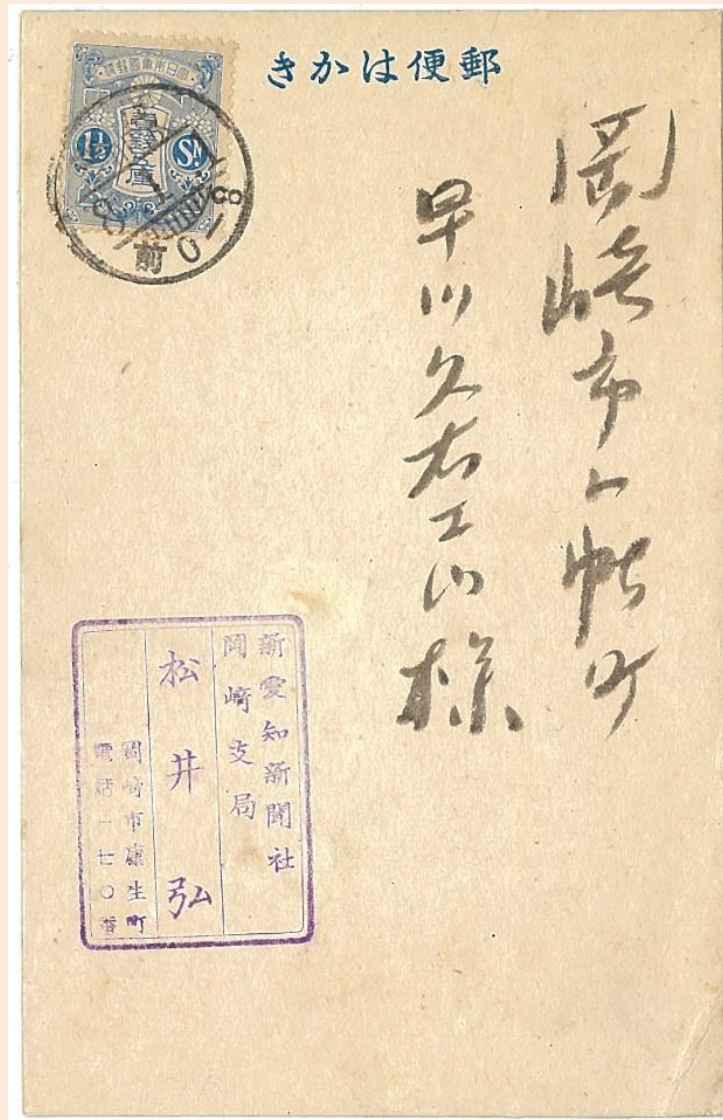
岡崎にいらっしゃった山岡荘八・菊池寛・武者小路実篤ら多くの著名人の接待役としても活躍されました。1927年(昭和2年)に建築された岡崎市六供町の松井邸は岡崎市内に残る最古の文化住宅で、菊池寛が「無憂荘」と命名されました。

岡崎市十王町の西本願寺三河別院には1931年(昭和6年)に岡崎納札会が建立した「浄瑠璃姫観月遺跡」があります。岡崎納札会は、1916年(大正5年)に稲垣豆人と松井弘が発足させた会です。大正から昭和初期にかけて千社札を名刺の様に交換し合った会で、三都に次ぐものでした。松井弘はその世話人の一人として尽力しました。遺跡の碑に「松井菅甲」の名前が刻まれています。

松井弘は大正、昭和期の新聞・広告・手紙・商品の葉・領収書・旅行案内・絵はがき・交通切符・社寺のお札・駅弁の包み紙などを貼り込んだスクラップ150冊余を残されていて、当時の貴重な世相風俗を知ることができます。岡崎地方史研究会会長の嶋村博氏は、松井弘のスクラップブックを元にした「みどりや主人の昭和史」を2020年(令和2年)4月から2023年(令和5年)7月まで東海愛知新聞で連載されており、2024年3月には連載記事をまとめた書籍「みどりや主人の大正・戦前昭和 - スクラップ帳が語る庶民史 -」を発刊されました。

当社史料室には大正・昭和時代に松井弘からいただいた絵はがきや、松井弘が書いた八丁味噌に関する記事が多数残っています。

菊池寛・山岡荘八について詳しくは「カクキューの八丁味噌を愛した著名人」の「菊池寛」「山岡荘八」をご覧ください。



松井弘から当社の17代早川久右エ門に送られた年賀状（大正8年1月1日）



みどりや主人の大正・戦前昭和  
スクラップ帳が語る庶民史



ISBN978-4-8331-0636-8  
C0039 ¥1800E



定価 1800 円+税  
風媒社



パンデミック後の大正・戦前昭和は「戦争の時代」へと進んだ。何故そうなったのか？世間ではそれをどう見て、どう感じていたのだろうか？本書はそうした時代の庶民の気分を、一個人が残した百五十冊のスクラップ帳から読み取れないかという試みである。

定価 1800 円+税 風媒社

嶋村博

愛知県岡崎市の玩具店「みどりや」店主の松井弘は世間でいう「成功者」であり、二十代には新聞記者をつとめた、「街のインテリ」でもある。しかし傲慢さや「上から目線」は一切ない。まったく「ふつうの人」の目で世間を見て、「大局」より自分の趣味に合う身近な「もの」や「できごと」を集めてスクラップ帳を作った。従ってそこから拾った話は、ローカルなものばかりである。しかしその分、「世間」や「うき世（憂世、浮世）」が見えやすいのではないかと期待している。

風媒社

嶋村博著「みどりや主人の大正・戦前昭和 スクラップ帳が語る庶民史」2024年3月10日発行

東海愛知新聞 2020年(令和2年)4月2日(木曜日) [2]

# みどりや主人の昭和史

岡崎地方史研究会会長 嶋村博

## ① 松井弘という人

岡崎市康生通の化粧品専門店「みどりや」には、初代主人・松井弘のスクラップ帳(以下「帳」と記す)が百五十冊ほど残されている。大正時代から昭和三十年代頃までのもので、新聞切り抜き、手紙、各種の広告チラシ、商品の領収書、旅行案内、絵はがき、交通切符、社寺のお札、駅弁の包み紙等々、ふつうの人なら捨ててしまふ紙片を集め、所々に解説や感想を書き添えて日記にしている。

昭和八(一九三三)年四月八月の「店頭徒然」と題した帳を開いてみる。国際連盟脱退の号外(写真裏)、ヨーロッパの世界的大流行の記事、「五・一五事件」公表の全文の号外、中伝馬に開店したカフェのチラシ、龍城座(岡崎公園近くにあった)での東京新派劇の宣伝チラシなどが、所狭しと貼られている。

表紙裏には、「自分の身辺に集まる紙片は新聞の切り抜き等々、文字通り雑然と貼付するのがこれだ。」(略)単純に平凡に自分の生活は此の冊子にもられて行く」と書かれている。松井は日々出合った紙片を貼ることで、自分の生活が見えるのではないかと考えた。こうして貼り続けられた百五十冊の帳は、松井弘という人の「半生記」であり、また同時代を生きた人々の日々の暮らしを語る貴重な記録でもある。

松井弘(まつい・ひろし) 明治23(1890)年~昭和43(1968)年。岡崎生まれ。新愛知初代岡崎支局長を勤め、大正10(1921)年、玩具店「みどりや」を開業する。健筆達文の趣味人で、彼の大正・昭和の新聞や広告等を貼り込んだ150冊ほどのスクラップ帳は当時の風俗を知る貴重な資料である。



り、戦後には市議会議員も務めた「新編岡崎市史総集編」など。写真Cはみどりやの商標である。松井のセンスの良さに感心する。私は氏とお会いしたことはない。みどりやには子どもの頃からよく行ったのだが、記憶にない。大正九年の帳「趣味日記」に松井弘の似顔絵が貼ってあった(写真A)。「素敵な紳士」と聞いていたおりの風貌である。この似顔絵は木版画で、原画を池上氏が描き、「彫刻」こと鈴木勤治郎が木版画に仕立てた。池上は当時岡崎商業学校美術教師、彫刻は彫り師で、松井とは岡崎趣味会という一年に玩具店「みどりや」を開業した。健筆達文の趣味人である。

嶋村博著 東海愛知新聞「みどりや主人の昭和史(1)」(令和2年4月2日)



# 閑翁閑誌

## “家康ブーム”に乗って 空中観音参拝

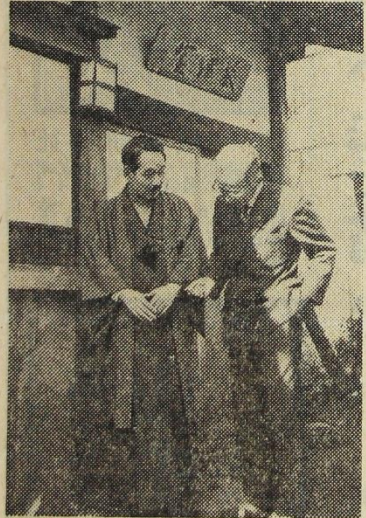
「それが、亡き特攻隊員への義務であると、考えた。(中略) 昭和二十五年執筆が許されると、せきを切ったように小説『徳川家康』を書きはじめた」

この雑誌には、山岡氏が邸内の茶経堂に安置してある、空中観音、像の前に端座して、亡き特攻隊員の霊をなぐさめる写真が出ていた。その雑誌はさらに「十三年書きつづけている『徳川家康』は、山岡氏にとって、生涯のテーマなのだ。脱稿までに、あと二年間はかかるという」と書いている。

松井弘は足掛け 13 年、東海新聞に「閑翁閑談」を連載した。左図は昭和 38 年 3 月 19 日の記事で、写真に写っているのは山岡 荘八 (左) と松井弘 (右)。なお、山岡 荘八の言葉として「私は大の八丁みそ党でしてね」と記載されている。

一番奥の建物で内部は淡暗い。一ぱくらの黒ぬりのお厨子の扉を開いて頂くと、観音像が拝される。聖観音菩薩の立姿である。ろっそくに点火、僕らは線香に火を移して捧げ、合掌拝礼した。山岡さんがここにおまつりしてある若い特攻隊の方々のご冥福をお祈りした。ところへ山岡さんが来られる。

「有り難う。よく参拝して頂いた、これもえんあればこそです。しかも徳川家康公にながるえんで……」と申される。又、僕の問いに答えて「この建物は、足利時代のものとのこと、山梨県、山深いところになりましたのを、こんど移したものです……これこの通り……」とその古さを示す箇所を指ささ



れる。ちょうど茶席として好都合、中央に炬が切つてあるし、民芸調の座布団も敷いてある。調度品も一切古く、歴史的の工芸品揃い、「空中と彫刻した木の古い額を、美術商から求めた奇えんにより、これを掲げ、空中散華の若人に思いを馳せ、又、本尊を空中観音と命名して頂いたのは長谷川先生で、先生の書もこの通り、額として御像の正面に奉安しています」といわれる。御像の左手には空へと姿の少年像が置かれて

あるのは、ありし日の面影がしのはれる。遺書、遺品、寄せ書なども見せられて、当時の話をきいた。僕は、しんみりちよろど電気に打たれたような気分になった。

「あなたに見て頂きたいもの」として、特に秘書の方に命じて掲げさせられたのは、牧野家伝来の家康公の書一軸であるし、連いの棚のせまい壁面にかけて頂いたのは光悦書の色紙であった。観賞しはし、感に入った。辞去の際の通り庭の石の間に

福寿草の黄色い花が咲いていた。満開の白梅も美しい。通された日本間には、藤田嗣治の画が目についた。額に「日は好日」の額を見たので、筆者をたづねたら天龍寺管長とのことであった。この座しきは、山岡さんの令嬢稚子さんが、舞踊の名取りで、その大会に、氏も一舞いすることとなり、あのおひげを剃り落して練習をしていられたところで、何かの雑誌でその写真を見たことがある。

▲ 応接間には、『小説現代』の編集長さんが来ていられた。四月号グラビヤに『食べ物』の特集として山岡さんも加わっているのを持参されたのであるが、恰かもその食べものというものが、何んと岡崎の八丁味噌のことであった。

「私は大の八丁みそ党でしてね」と申された。(つづく)【写真は茶経堂前の山岡 荘八氏と筆者】



「松井菅甲」と刻んである

浄瑠璃姫観月遺跡

# 岡崎の成長と共に100周年



岡崎空襲前のみどりや



岡崎空襲後のみどりや



岡崎市康生通東に本店を置く「みどりや」が今年で100年を迎えた。現在は取締役である4代目の松井洋一郎が化粧品店を5店舗経営している。遡ること100年前、大正10年(1921)7月にみどりやは誕生した。初代の代表である松井弘の娘さんの名前が「みどり」であったのが

由来である。当時は化粧品店ではなく、玩具店。なんと500円の現金を元手に商売を始めたという。現在の相場にすると約50,000円で商売を始めたということになる。「機会を活かせ」という資料が残っており、そこには「商売の趣味化」についての12項目が残されている。文学が好きで資料の中には武者小路実篤氏と写った写真も残されている。多様な人脈がありみどりやは大きくなっていく

た。とにかく研究熱心で新しいもの好きであった初代は、玩具店だけではなく喫茶店も始める。当時の開店チラシが今でも残っている。赤と白のモダンなデザイン、何とお洒落なチラシだ。そんな順風満帆なみどりやに転機が訪れたのは太平洋戦争末期、昭和20年(1945)の岡崎空襲。爆弾を投下され、連尺町や康生町などの中心部が焼かれてしまった。康生町では100件近くのお店が焼かれている。その時、立ち上がったのが弘であった。いち早く低利復興資金2,000円を借り入れて簡易バラックを購入、そして商店街を作る。こうして康生町は活気を取り戻していった。二代目を受け継いだ松井茂雄は初代にも勝る、まちづくり熱心な人物。みどりやの経営以外に中心市街地の再開発も手掛けていた。これは日本で最初に手掛けた再開発と言われている。その他、まちづくり会社やエネルギー公社の社長も務めて、商工会議所やJCでも活躍。「子供の頃、



大好きで憧れの存在だった」と4代目の洋一郎は語る。三代目の松井勝彦は洋一郎が最も尊敬する人物だという。関わるすべての方とファミリーでありたいというのがモットーで、家業として成長させていくことを大切にしていた。それを受け継いで家業であるみどりやを営みながら、岡崎まちゼミの代表も務めている。まちづくり岡崎の代表取締役として、まちゼミを中心に岡崎にてさまざまなまちづくり施策に取り組み。また内閣府地域活性化伝導師でもあり経済産業省タウンプロデューサーとして全国各地の中心市街地・商店街の活性化に関わっている。実は、2016年に本誌にてインタビューを行った。その中で、商店街の復興に対する想いを語っている。「個店を良くするために大切なことが3つあります、ひとつは自分の商いに対するプライド。2つめは繋がりと連携。3つめは諦めないということです。このように語る。4代目は初代・2代目・3代目のDNAをしっかりと受け継いでいると言えるだろう。まちゼミは現在日本全国に広がり、街を元気にしている。



株式会社 みどりや  
住 岡崎市康生通東1丁目21  
TEL 0564-21-0985